

## 東日本大震災と「心の花」⑥ 藤島秀憲

昨年六月号から今手元にある三月号までの「心の花」から震災に関連する歌を選び、半年にわたって時評に取り上げて来た。だが、次第に、震災の歌という分類の仕方が無意味に思えてきた。三月十一日以降に作られた歌は全部が震災の歌なのではないか。物の見方や感じ方、言葉の選択などあの日を境にほとんどの歌人が変化しているはずだ。たとえば、三月号の次のような歌。

・スチームの見えぬ加湿器頼りなきものに包まれ年ゆかんとす

由田 欣一

「頼りなきもの」と捉える感覚は、震災後に生れた感覚ではないだろうか。震災前はスチームが見えない加湿器を我々はなんて頼もしいかと思っていたのではないだろうか。あの日からしばらくは確かなものなど存在せず、どれもこれもが頼りなく思えたものだった。また、「年ゆかんとす」の感慨も震災の年という意味合いを当然含んでいるはずだ。一見すると震災とは関係ない歌であるが、震災の影響を深く感じるのである。

・「仙台に帰りたいです。」唐突な一文で終わる子の感想文

俵 万智

・がれきめぐる山野の緑増しゆけばかへらぬ命風にはほへり

山口 明子

・言葉かわすことなく下向き髪洗う南相馬の人と並んで

新留紀代美

・震災遺児の悠太は九歳六ヶ月いつか漁師になりたいと云う

田中 章義

・ふたたびは傾くなかれ地中杭二十五本が鎮めの神ぞ

間宮 清夫

三月号から更に五首。それぞれの後を詠んでいる。一首目、沖繩に移り住んでいる作者。母を気づかい子は本心を隠していたのだろうか？ 原発事故は遠く避難している子供の心にも影響を与えている。二首目、岩手在住の作者の周囲を甦つたものと甦れないものとが取り巻く。自然の回復力と一度しかない生命の尊さが描かれている。三首目、「言葉かわす」と詠んでいるが実際は「かける言葉がない」と表現したかったのだと思う。避難という現実を目の当たりにして打ちのめされている作者像。四首目、他の作品から悠太の父は漁師だったとわかる。子供の純真さと健気さ。悠太は今でも父が大好きなんだ。五首目、液状化現象により家を建て替えることになった作者。被害を受けてから今日という日にたどり着くまでの万感の思いが詰まった祈りである。

これから先、春が訪れようとする頃、鎮魂の歌が詠まれてゆくであろう。一方で歌は風化という現象に常にさらされている。

・ああ電気、これも電気、と触れながら重い扉を開けそうになる

細溝 洋子

昨年の六月号の歌。今ならわかる。停電を体験した人もしなかった人も発電の段階から電気を意識せずには居られなかった。重い扉とは何なのか？ 使われなくなった原子力発電所の扉と今の私は読む。触れても「ああ電気」と思わなくなる時がきつと来る。その時にこの歌はどう読まれるのか？ 奇跡的に風化を免れたとしても、読者の震災の記憶は薄れてゆくのだろうか。